

『映画教室』 1950年3月 (日本映画教育協会)

単元学習と

映画★幻燈

映画

細菌物語 2巻

日本映画社作品

内容 まず人間の顔のクローズアップからカメラの眼はいきなり人間の身体の中に入って行く。皮膚の下に縦横に走る血管、その中を流れる血液、休みなく働く心臓などを拡大して見せて、人体が無数の細胞から成り立っていることを説明する。ところでかかる生命の営みを絶え間なく脅かす恐しい敵がある。それはわれわれを取り巻く種々の細菌である。カメラは、顕微鏡の力を借りてそれ等の微生物の生態を画面いっぱいに描き出す。チフス菌、コレラ菌、大腸菌、葡萄球菌、炭疽菌、結核菌、スピロヘータ、癩菌等々が捉え

られる。また体内に侵入した細菌に対してわれわれの身体を守る白血球の働きも描かれる。次いでカメラの眼は恐るべき癩菌とそれによって倒されて行く人間の悲惨な姿、そしてその治療に献身する人々の働きに向けられて行く。癩病院のベッドの上で長い病気に肉体を蝕まれた一人の患者が最後の息を引きとって行く。またしても癩の前に敗北した医者は静かな瞑想に耽っている。この辺はこの映画の中でもヒューマニスティックなおいのする所である。一方、科学はこれ等の細菌に対して絶えざる戦を挑んでいる。すぐれた治療法が久々に発見されて行く。例えば、ズルフォンアミド剤の発見、ペニシリンの発見など、かくして人間の意欲と努力の結晶は次第に細菌の征服に向って行く。遂に細菌の培養に成

功する。それは癩症服の第一歩であり、その治療への曙光が見えて来たという所でこの映画は終わっている。**指導上の注意** この映画の描いているものはどこまでも細菌の世界である。うんざりしてしまう位、最初から最後まで細菌の物語である。それだけ細菌の恐しさ、気味悪さを実感させられる。カメラと顕微鏡の眼がそのような効果をあらわしている。だがこれを科学映画というにはどうしても突込みが足りない。顕微鏡の下に動きまわる細菌を捉えただけであって、科学的な原理的な思考をさせる所がない。これが自然学習のための教材映画としては弱い点である。むしろこの映画は社会学習のための教材として利用すべきものである。細菌の生態を克明に描いているが、画面の背後に一貫して流れているものは人間の意志であり、努力である。つまり人間は細菌といかに戦っているかということが中心のテーマとなっている。社会科学で保健衛生の問題について学習する場合にこの映画を見せるならば、細菌がどんなに恐しいものであり、細菌との戦がどんなものであるかを理解させることがで

きるだろう。ただその際に何等かの方法でかかる顕微鏡的な世界とわれわれの日常の世界との橋渡しをしてやる用意が必要と思われる。例えば、一滴の水の中に日本中の人口よりも多い細菌が生きているのだという如き考え方が何んとかして与えられなくては細菌の世界は分らないのである。これは小学校高学年から中学校辺りで好適な教材映画となり得る。

桜島 2巻

東宝教育映画作品

内容 この映画は産業地理大系第二巻となっている。まず火山系の説明から入って、あのような海の中にどのようにして桜島が出来たかが解説される。次いで、文明から昭和に至る幾度かの噴火によってどのようにに熔岩が噴出し、どんなに地形が変化したかが模型を用いて表現される。桜島の近くに燃島が出来たことや桜島が大隅半島につながってしまったこともわかり易く説明される。此処までは純粹な自然地理であるが、次に視点は人間の生活の上に移され

て行く。最初にこの島に人間が住むようになつて以来、住民はかかる自然の中でいかに生活してきたのであるか。ものすごい熔岩のながれによつて家はつぶされ、畑は埋められてしまう。しかし住民は長年住み馴れた土地を離れようとはしない。熔岩のほとぼりがさめると再び帰つて来て、小屋を建て、畑を作り、細々ながらも生活を打ち立てて行く。熔岩の間に焼け残つた雑木を伐つては薪にして売りその日の糧を得て行く。飽くなき土地への執着力というようなものが迫力を以て描かれている。自然の暴威に打ちのめされてもまた立ち上つて行く人間の姿にはたしかに心打たれるものがある。

指導上の注意 この映画のねらいは結局、人間は自然環境をいかに克服して生活しているかということである。その意味でこれは小学校高学年に於ける社会学習のための教材映画として十分使い得るものである。但し、事前の指導として、自然環境と人間生活との関係について十分よく問題を考えさせて置く必要があることはもちろんである。また、この映画を見せた後の指導としては、此

処に描かれているものが決して自然の克服のただ一つのあり方ではないということに是非とも気付かせてほしい。この島の人間は低い苦しい生活にじつと耐えることによつて自然の力に対抗しているのであつて、それは自然の克服というにはあまりに消極的であり、みじめでさえある。その暗さ、みじめさは子供といえども感ずるに違いない。そこで、これとは全く異つた自然克服の姿を如実に見せてやる必要がある。例えば、アメリカのT・V・Aのような全く対照的なものを見せてやつてはどうであろうか。恐らく生徒は自然環境の克服について一つの問題のあることに気付き、一層深く考えを進めて行くようになるであらう。それはつまり科学の力がこの部面に動員されねばならぬということであつて、この映画でもその点は最後に問題の形で投げかけているのである。この映画の他に種々の教材を用い、生徒の学習をそのような方向へと発展させて行くことがのぞましい。

中央教育研究所

《ライブラリー編集者注》
本編には執筆者として矢口の名はないが、この時期に中央教育研究所で映画教育を担当し、最も力を入れていたのは矢口であるため、矢口の執筆によるものと判断した。